

西山手高齢者生活支援センター

令和7年度 西山手高齢者生活支援センター 重点項目

～若い世代への認知症啓発について～

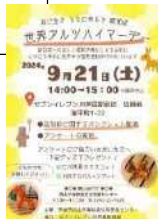
芦屋市西山手高齢者生活支援センター
令和7年7月23日時点

活動概要

認知症への理解を深めるため、地域住民に向けた啓発活動
特に若い世代へ・子育て世代へのアプローチが不足していると感じ
今年度は若い世代へ向けた活動を取り組む予定

きっかけ

令和6年度 9月21日
世界アルツハイマーデーイベントにて認知症の啓発を実施
アンケート結果から、若い世代(子育て世代)は
「学びたいが、きっかけがない」「忙しくて時間がない…」
この世代への学びや理解を深めるアプローチが必要



目標

地域住民と協働して、さまざまな方法で
認知症への理解を深めることができる

内容・取り組みスケジュール

- ・9/21(日)アルツハイマーデーイベント
セブンイレブンJR芦屋駅前店 14:00～15:00
対象：地域住民
⇒6年度同様に、アンケート・啓発グッズ・ほっとナビ等配布
〇広報あしや 9月号掲載 チラシ配布
- ・10/18(土) ハロウィンイベント 予定
場所：前田集会所
内容：認知症講座、仮装イベント
対象：子育て世代

取り組みポイント

- ・生活支援コーディネーターと協働し地域資源のマッチング
⇒企業の地域貢献や住民の得意な事や特技を組み合わせイベント実施
手作りのロバ隊長マスコットストラップの作成は
手芸が得意な住民のかたにご協力頂く。
今年度は、ロバ隊長マスコット以外にも赤ちゃんスタイも作成予定
- ・兵庫医科大学病院認知症疾患医療センターとの連携
⇒相談員の方に、講座講師として協力頂く予定
- ・“楽しい”をきっかけにして、認知症を知る機会を確保
⇒認知症のみのテーマでは、若い世代へのアプローチは難しい。
楽しい、参加してみたい、親子で参加できるなどのイベントが
きっかけになるように企画。

1

重点項目 令和7年度取組報告

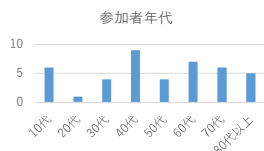
取組結果

・世界アルツハイマーデー啓発イベント

日時：9月21(日) 14時～15時
場所：セブンイレブンJR芦屋駅前店
対象：地域住民
内容：アンケート実施・啓発グッズ・ほっとナビ等配布



- ・ロバ隊長手作りマスコット、ベビー用品は地域住民に協力いただいた。
- ・ひとり役ワーカー体験会として、ボランティア(5名)にご協力いただいた結果、アンケート回答者42名。



良かった点

- ・「認知症になっても安心して暮らせる地域」にはどんなことが必要だと思いますか?の質問に対し、
みんなの理解があること
地域と繋がっていること
社会で見守る、支え合い 等の意見あり。
- ・「今まで考えたことがなかったけど、今日をきっかけに考えてみます」と世代を問わず、認知症を知る・考えるきっかけを作ることができた。
- ・ひとり役ワーカーも認知症についてあまり知らない状態から参加しており、理解が深まった。
- ・ハロウィンアートやロバ隊長マスコットが通行人の立ち寄りのきっかけになった。

課題

- ・開催時間が短いという声があり、ロバ隊長マスコットを渡すことができない方もいた(30個用意)
- ・ベビーグッズは対象年齢の子どもが少なく、グッズ内容と参加者層のずれがあった
- ・広報媒体がチラシのみ、たまたま通りかかった方がほとんどだった。
- ・公的機関だとわかりにくく、不安を感じた様子だった。



- ・デジタル媒体(ためマップ、オープンチャット等)の活用
- ・グッズ作成の協力者を早期に募り、協力いただきながら、認知症について学ぶ機会を作りたい。

2

西山手高齢者生活支援センター

芦屋市西山手高齢者生活支援センター
令和8年8月28日

取組結果

・ハロウィン×認知症 ～親子で楽しく認知症を学ぼう♪～

日時：10月18日（土）14時～15時30分

場所：前田集会所

対象：子育て世代

内容：①認知症講座

（講師兵庫医科大学病院認知症疾患医療センター相談員）

②フォトフレーム作り（協力：CG・J）

③フォトブース撮影

④お菓子プレゼント

参加者：12名（大人7名、子ども5名）



良かった点

- ・認知症疾患医療センターの協力もあり、若年層にもわかりやすい「新しい認知症観」を伝える講座を実現することができた。
- ・民生委員、学生ボランティアにも協力いただき、特に学生の活躍が住民への良い刺激となった。
- ・フォトフレーム作り等のアクティビティを行うことで、認知症への心理的ハードルを下げて啓発ができた。

課題

- ・運動会等其他のイベントと重なり、申込数が想定を下回った。
- ・主な広報方法がチラシ配布や掲示であり、チラシの内容やタイトルに「認知症」が強く出すぎたため、子育て世代が「自分たちは対象外」と感じた可能性がある。
- ・会場が駅から遠く、駐車場がないなどの利便性に難があった。
- ・当初、他会場を検討していたが、交渉や費用感の認識不足があり、関係性づくりの必要性を再確認した。

次回に向けて

- ・準備期間を十分に確保し、近隣の行事等に合わせた早期の宣伝を行う。
- ・申し込みフォームの活用やネットで詳細を見られる仕組みを構築する。
- ・認知症サポーター養成講座の受講生が活躍できる場を具体的に提供する。
- ・福祉の押し付けにならないよう、日常的な地域との関わりを深め、生活者視点でのイベントを企画・発掘していく。

東山手高齢者生活支援センター

令和7年度 重点項目取組報告

～要援護者が取り残されない地域づくりを目指して～

【背景】

災害時に支援が必要な高齢者を地域で支えるためには、日頃の個別支援（ケースワーク）と地区防災の取みをつなげていくことが必要ではと考えた。今年度は朝日ヶ丘地区で地域・行政・専門職との連携づくりに取り組んだ。



令和7年度の取り組み

年間を通じて朝日ヶ丘地区防災会の活動に参画

定期的な会合に出席
→地区防災の取り組み、地域での役割を知学ぶ。

関係機関による意見交換会・情報共有の会の実現に向けて準備をおこなった。



地区防災会
会合

夜間防災訓練

朝日ヶ丘地区
防災訓練

コミスク
秋まつり



地域の防災活動を理解し、
顔の見える関係づくりを進めた



要援護者を取り残されない地区防災体制の構築を目指して

朝日ヶ丘地区防災意見交換会の実現



こんな目的で開催

テーマ：

「災害時に高齢者をどう地域で支えるか」

災害時に高齢者が安全に避難できるように、地域、専門職（CM等）、行政が連携し、情報共有や支援体制の準備について意見交換を行い、互いの活動内容や困りごとを知り直接つながるきっかけを作ることを目的に9つの関係機関が集合。



互いの役割や課題を共有し、
平時からつながる機会となった。



要援護者を取り残されない地区防災体制の構築を目指して

こんな意見がでた

- ①物理的・環境的制約
- ②個人情報の壁
- ③有事の対応
- ④非日常ではなく、
日常のケースワーク
の延長線上の視点

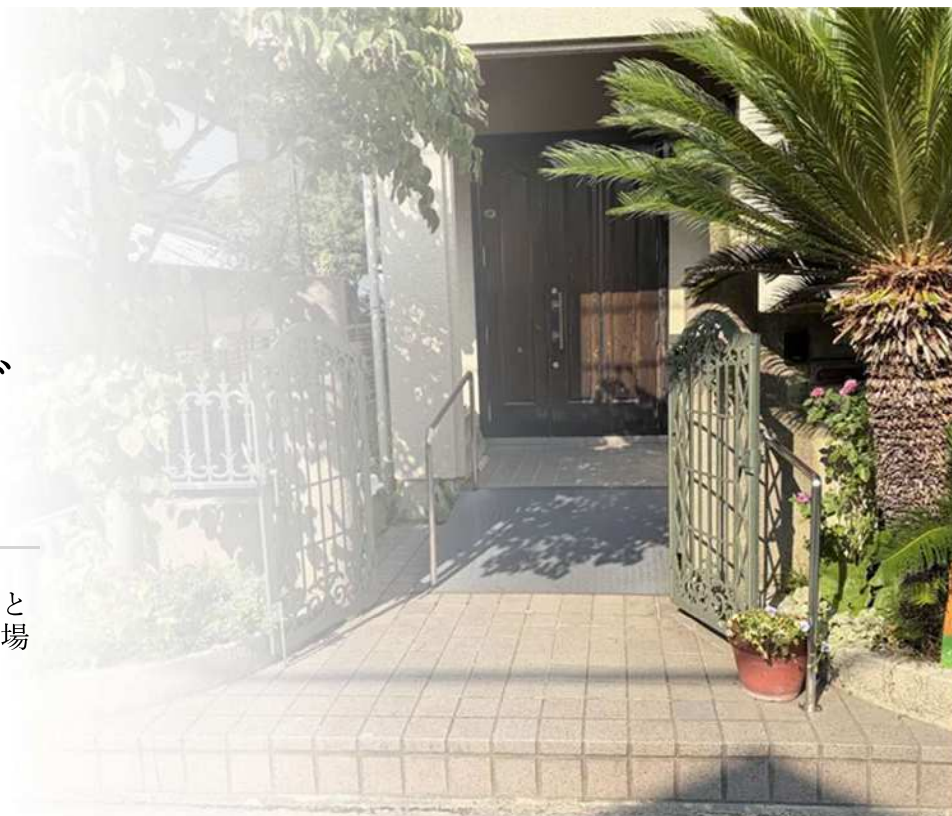


取り組みから見えた成果

- ①地域との信頼関係が深まった
 - ・地区防災会との継続的な関係構築
 - ・行政・専門職との横のつながりが強化
 - ・平時から相談・連携しやすい関係づくりにつながった
- ②地区防災の課題が明確になった
 - ・要援護者支援 ・個人情報の共有 ・有事の役割分担
 - ・今後取り組むべき課題を共有することができた
- ③ケースワークの視点が地区防災につながる
 - ・個別支援で把握した高齢者の生活課題や支援ニーズを
地域課題として地区防災へつなげる
という視点を持つことができた

ガーデニング プロジェクト

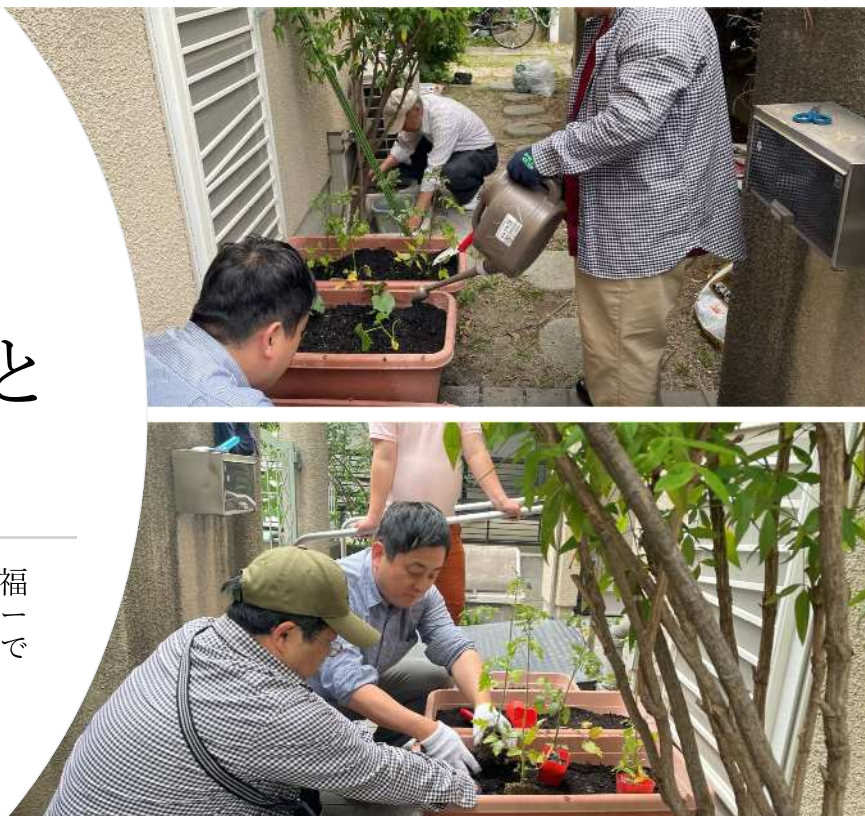
庭を持て余す樹楽デイサービスと
野菜を作りたい住民を繋ぎ、居場
所と活動の場を創出



月	スケジュール
4月	樹楽デイと住民をマッチング。住民と民生委員、デイ職員、包括、社協職員で活動について話し合い。
5月	週1回木曜日の13時から14時に野菜作り、庭の手入れの活動。
6月～8月	暑さ厳しく、活動を夕方に変更。野菜作り、庭の手入れ継続。 取れたて野菜の品評会実施。トマト、キュウリ、オクラなど。 活動を継続することで、住民とのつながりが強くなる。
9月	住民がひとり役ワーカーに登録。
10月～12月	樹楽デイの運営推進会議に自治会長参加。今後の活動に参加。 参加住民増加し、看板犬ができる。小学生が楽しみに立ち寄ることが増える。 自治会長主体で、庭の木を伐採。庭の木を片付ける。
1月～2月	冬期休。
	冬期休。
3月	住民主導で活動再開。

たくさんの人との 出会い

地域住民、民生委員、自治会長、社会福祉協議会職員、精道包括職員、デイサービス職員と協力し、地域のつながりができ、庭の手入れ、野菜を育てた。



オクラ、キュウリ、トマト、カボチャや大根、イチゴなど季節に合わせて、たくさんの野菜や果物を収穫できました！



看板犬もできました！
看板犬のおかげで、
子供たちも「何してるの？」と
立ち寄り多世代で交流生まれる。



精道高齢者生活支援センター

デイサービス側は地域とのつながりの重要性を再認識する機会となり、庭の整備や野菜作りを通して、居場所・活動の場が創出できた。また、ひとり一役活動にも繋がられた。

現在も活動、交流は継続している。

これからも社会資源と地域住民をつないでいきたい。



高齢者の課題を解決する

スマホ相談会 の可能性



潮見高齢者生活支援センター

立木 綾

高齢者のスマホ事情



AIによる画像生成

1. 高齢者のスマホ保有率増加
2. SNSを通じた他者との交流
3. 情報収集ツールとしての活用
4. カメラとしての活用

and more

高齢者のスマホ課題

1

操作がわからない



2

カタカナ・専門用語
がわからない



3

詐欺や悪質商法が
心配



4

何回も同じことを
聞くと家族に怒られる



ショップ店員に聞いても、予約が必要、費用がかかる
不要なオプションや不適切なプラン変更も実際ある・・・。

潮見地区の種まき状況

★陽光町でスマホ相談会定例化



★緑町でスマホ相談会の芽がでそう！！



高齢者の課題解決に向けて

スマホ相談会を開催し、高齢者のネットリテラシーが向上すると・・・



さいごに

高齢者の生活の困難さ解決の糸口としてスマホ相談会
を地域に広めていきたい！！



THANK YOU!

令和7年度 打出浜高齢者生活支援センター 重点活動項目（結果報告）

03

活動の概要

当センターは令和6年10月に新たに設置されたが、市のアナウンスからセンター開設までの期間が短く、地域住民への周知が十分ではなかった。そのため、センターの認知度向上を目的として、圏域内の全戸、医療機関、商店等へチラシを配布した。

課題と目標

- ・課題：地域住民に、新しい高齢者生活支援センターが認知されていない。
- ・目標：地域住民や圏域の地域資源へ、打出浜高齢者生活支援センターの役割や場所の周知を図る。



具体的な活動

- ・6月 チラシの内容についてセンター内で検討し、チラシを作製。業者への印刷依頼&納品
- ・7月～3月 センター全職員で手分けし、圏域の全戸（約8,000戸）にポストイン。商店等については手渡しで配布。

取り組み結果

- ・センター職員自らが地域を回ることによって、地域の生活環境や地域資源の把握、顔の見える関係作りに繋がった。
- ・全戸配布を目指したが、集合住宅によってはチラシ投函禁止のところもあり、管理人や管理会社に掛け合ったが、配布ができない世帯もあった。

課題

- ・「チラシを見て来所・相談した」との事例を約10件確認した。、チラシの配布によって相談に繋がったかどうかの正確な件数を把握できていなかったため、チラシ配布による効果が不明。
- ・チラシを配布した世帯からの相談で、「チラシを見ていない」との声も聞かれ、今後も地域へ積極的に向かい、顔の見える関係づくりを進めながら、センターの周知を継続していく必要がある。

精道高齢者生活支援センター 基幹的業務担当

芦屋市における多職種連携推進ネットワーク構想(案)策定に向けて

令和7年度 精道高齢者生活支援センター基幹的業務担当作成

- 地域包括ケア体制の具現化の一つとして、市内5か所のエリア(センター担当圏域)毎に「どのようなネットワークがあればより多職種連携を推進できるか」について可視化を試みるもの。
- 多職種連携推進ネットワークを構想するにあたり、令和7年度は、①地域ケア会議、②医療介護連携、③生活支援体制整備事業、④包括的支援体制(特に重層的支援体制整備事業における多機関協働事業)、の4点と地域包括支援センター・ケアマネジャーの接点に絞って現状分析を実施。
- 「多職種連携ネットワーク構想立案」には至らなかったが、①包連会とセンター連絡会、②地域ケア会議、③人材育成(スーパービジョン機能を有する事例検討会)の実態把握と、必要な改善へと展開する材料となった。

現状分析の3つのポイント

Point ①



その事業(取組)にはどのようなねらいがあるのか？

Point ②



具体的な取組によって何を生みだしてきたのか？

Point ③

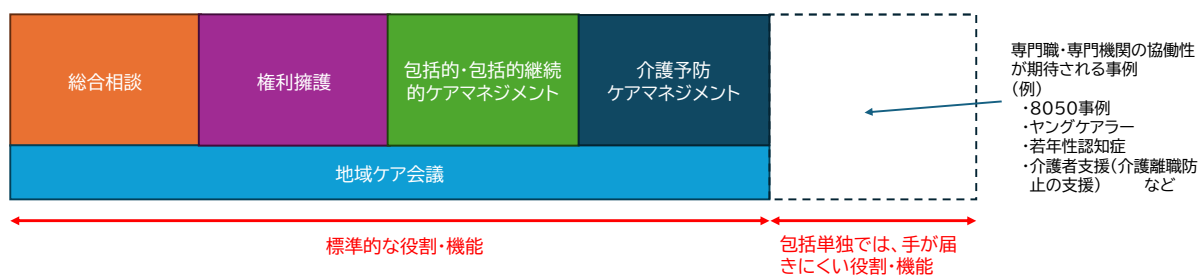


さらなる発展に向けてどのようなのびしろがあるのか？

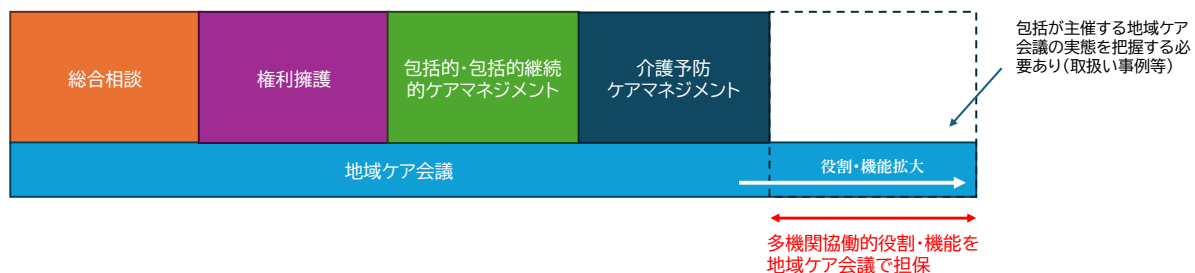
1

地域ケア会議の守備範囲～現行会議の分析～

(1) 一般的な地域包括支援センター



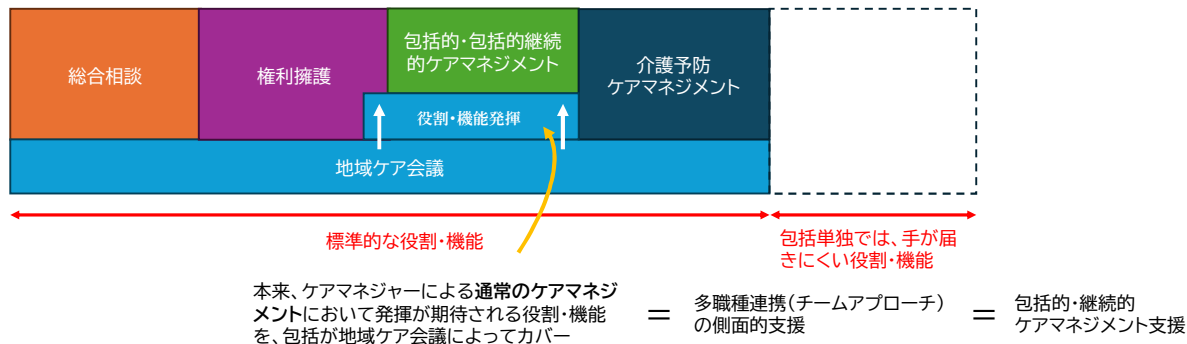
(2) 包括的相談支援の機能を発揮している地域包括支援センター



2

精道高齢者生活支援センター 基幹的業務担当

(3) 精道地域包括支援センターの実態(ヒアリングをもとにしたイメージ)



地域ケア個別会議と多機関協働支援会議の機能整理(基幹的業務私案)

	地域ケア個別会議	多機関協働支援会議(随時型)
①会議目的と機能	・ チームアプローチの促進	・ 多様な機関による協働性の担保、支援者の拡大(≒チームビルディング)
②会議の参加者	・ 当該利用者とかかわっている人(原則、現在進行形)	・ 当該利用者(世帯)とのかかわりの有無を問わない(必要に応じて「以後かかわってくれる人」であることが望ましい)
③会議の取扱い事例	・ 必要な支援のために、情報共有や支援方針の検討が必要な事例(原則として高齢者)	・ 当該世帯の抱えている地域生活課題を解決するために、多様な機関によるかかわりが期待される事例

3

自立支援型地域ケア個別会議の分析～検討事例の特徴とリハ職の訪問への展開実績～

(1) 検討事例の基本チェックリスト評価

運動器	21件	87.5%
栄養改善	4件	16.7%
口腔機能	11件	45.8%
閉じこもり	2件	8.3%
認知症	8件	33.3%
うつ	18件	75.0%

ほぼ全数が運動器に関する課題あり

(2) 検討事例の基礎疾患

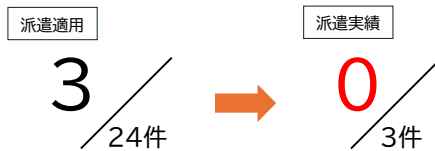
筋骨格系疾患と結合組織疾患	25件
循環器系疾患	16件
脳血管疾患	9件
内分泌系疾患	5件
神経変性疾患	3件
消化器系疾患	3件
呼吸器疾患	3件
精神疾患	2件
がん	2件
泌尿器疾患	2件
自己免疫疾患	1件
その他	5件

脊柱管狭窄症、変形性膝関節症、大腿骨頸部骨折が多い

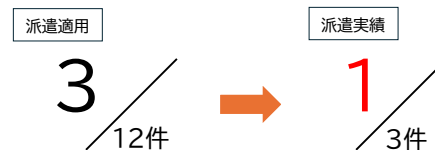
(3) 会議内でのリハ職派遣適用と派遣実績

会議において「リハビリ専門職の派遣による評価等の適応」と判断された場合に、リハビリ専門職が訪問するシステムを導入。(地域リハビリテーション活動支援事業、2023年度開始)しかし、派遣に至った実績が少なく、自立支援型地域ケア個別会議から地域リハビリテーション活動支援事業への展開には課題を残している。

① 2024年度(24検討事例)



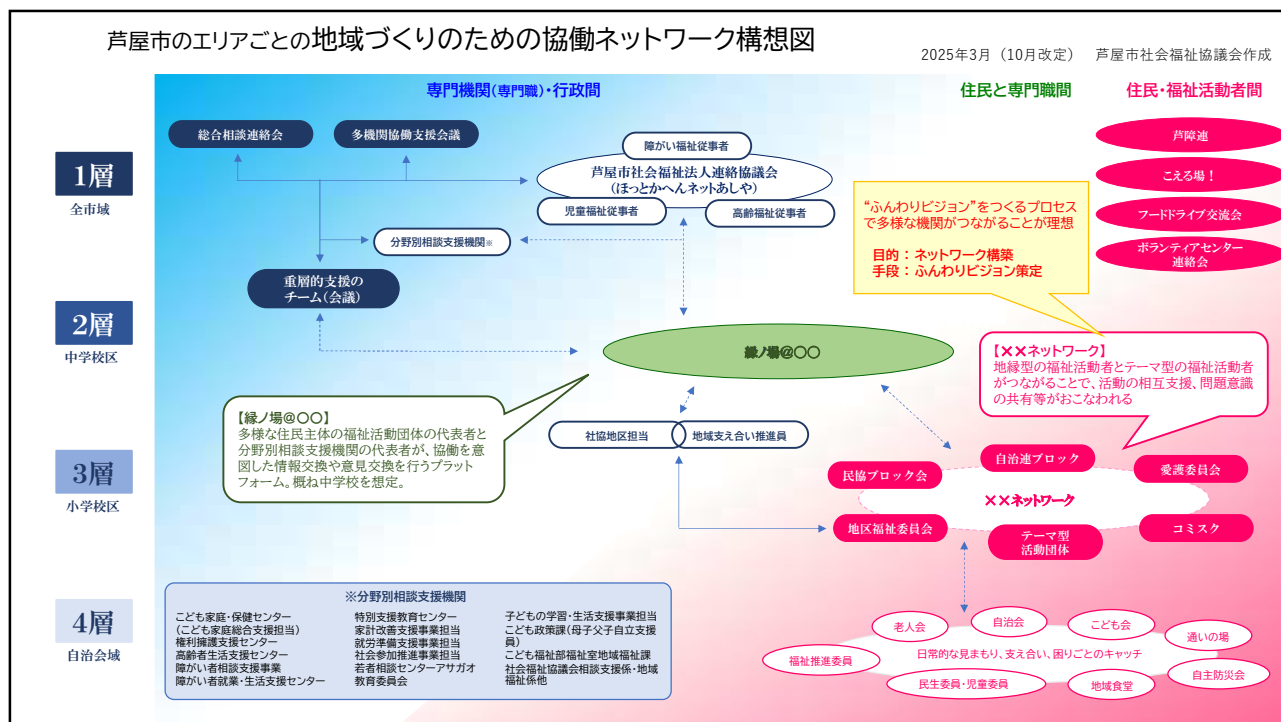
② 2025年度(12事例検討)



※ 基礎疾患は、検討事例資料に記載のあった疾患をICD-11をもとに分類

4

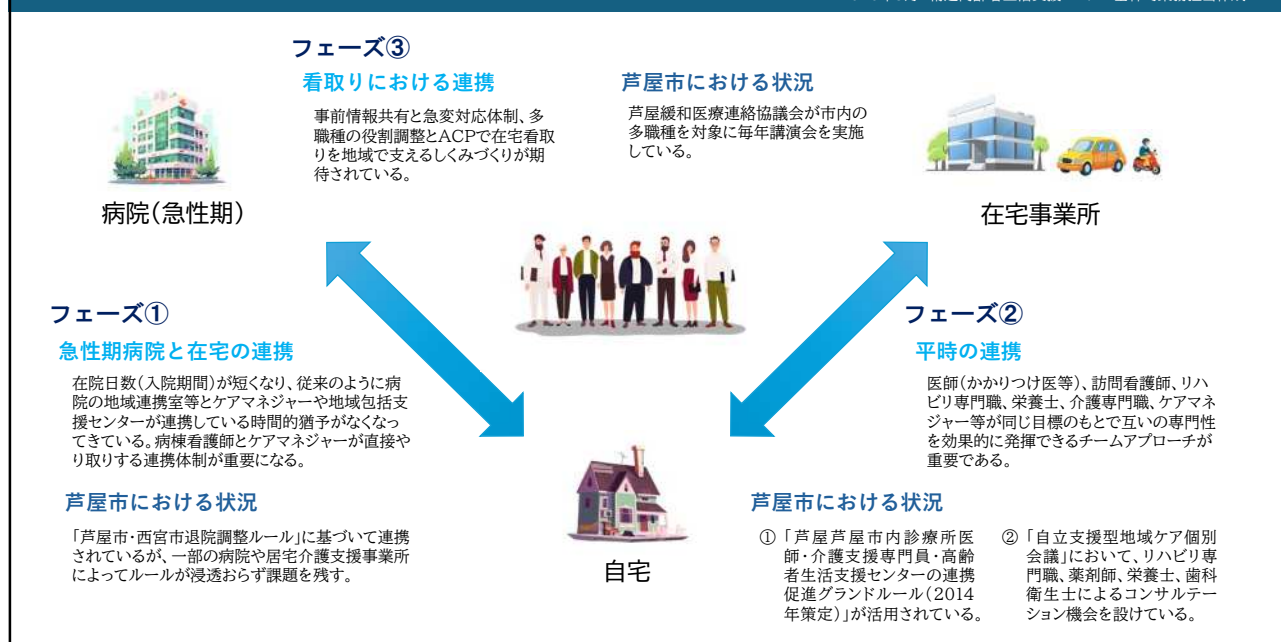
精道高齢者生活支援センター 基幹的業務担当



5

芦屋市における多職種連携(医療介護連携)の3つのフェーズと状況

2026年3月 精道高齢者生活支援センター基幹的業務担当作成



6

多職種連携推進ネットワーク構想(案)策定に向けた課題

1. 既存会議のリノベーション（新たな会議機能の付加）

- ・ 自立支援型地域ケア個別会議のように、包括職員から「会議負担と成果のバランス」が崩れているという意見も多数耳にしている。
- ・ 会議数を増やすことなく、会議機能を付加することで業務負担を増やすことなく会議をリノベーションしていく必要がある。（例：センター連絡会にスーパービジョンの機能を有する事例検討会を付加する）
- ・ また、ルーティーンに開催している会議については、有効性や生産性をきっちり吟味し、思い切って「やめる」という選択をしていくことも検討する。

2. 会議システム（複数の会議の発展的統合、会議間の連動性）の再構築

- ・ 個々の会議機能を再検討するだけでなく、複数の会議を発展的に統合したり、会議間の連動性を強化するような「システム全体の見直し」も重要であると考ええる。
- ・ 法・制度改正、地域福祉計画等の中長期計画立案時期でもあることから、高齢分野に限定せず、俯瞰的にシステム全体について見直す時期でもある。
- ・ また、新たに始まる「頼れる身寄りのない高齢者等への支援（福祉サービス・保健医療サービス等利用援助事業）」の導入については、地域ケア会議等による関係機関間の連携推進も期待されている。分野を横断し有効に機能する会議システムへとブラッシュアップしていく必要がある。